

# お薬のしおり



No.223 (R2.12)

東京医科大学病院 薬剤部

監修：東京医科大学病院 感染症科

## インフルエンザの治療薬と注意することについて

寒さも厳しくなり、インフルエンザの流行時期が近付いてきていますが、みなさんはインフルエンザの予防はできていますか？前回はインフルエンザワクチンのお話をしましたが、今回は、インフルエンザにかかってしまった場合の治療方法と注意点についてご紹介します。

### ○インフルエンザの症状は？

インフルエンザウイルスに感染した場合、約1～5日（平均3日）の潜伏期間<sup>せんぷく</sup>の後、症状が発現<sup>きかん</sup>します。初期は突然の38℃以上の高熱<sup>せんしんけんたいかん</sup>・全身倦怠感<sup>ぜんしんけんたいかん</sup>・食欲不振<sup>じょくよくふしん</sup>などの全身症状、その後、やや遅れて咳<sup>せき</sup>・のどの痛み<sup>のどのいたみ</sup>・鼻水などの呼吸器症状が現れます。さらには腰痛<sup>おしん</sup>、悪心などの消化器症状を訴えることもあります。通常は、1～2週間で治癒します。

### ○インフルエンザの治療は？

インフルエンザにかかってしまったかなと感じたら、事前に医療機関へ電話相談し、その後受診するようにしましょう。インフルエンザは発症後すぐに治療を行うことが重要です。また、早目に治療するということは、周りの人への感染を防ぐという意味でもとても大切です。

インフルエンザの治療は、一般療法と薬物療法の2つに分けられます。

#### 【一般療法】

- 安静にして十分な休養をとる（特に睡眠）
- 水分補給を十分に<sup>きゅうよう</sup>にする（お茶・ジュース・スープ等飲みたいもので良い）

#### 【薬物療法】

主に抗インフルエンザウイルス薬を使用します。インフルエンザウイルスは増殖のスピードが速く、症状が出現して48時間以内にウイルスの増殖のピークがきます。このため、インフルエンザ治療薬による治療はこの48時間以内に開始できると、より効果的となります。



## ○インフルエンザの治療薬（院内採用薬）は？



### ●ノイラミニダーゼ<sup>そがいやく</sup>阻害薬

ノイラミニダーゼは、ウイルスが細胞内に入り込んで増殖した後、その細胞から離れて別の細胞に移動するときに働くタンパク質です。そのノイラミニダーゼの働きを阻害することで、ウイルスの増殖を防ぎます。内服薬、吸入薬、注射薬（点滴）の3種類があります。

**内服薬**：オセルタミビルカプセル・ドライシロップ

**吸入薬**：イナビル吸入粉末剤

**注射薬**：ラピアクタ点滴静注液

### ●キャップ依存性エンドヌクレアーゼ<sup>こうそ</sup>活性阻害薬：ゾフルーザ錠

キャップ依存性エンドヌクレアーゼは、インフルエンザウイルス特有の酵素です。本剤はこのキャップ依存性エンドヌクレアーゼの活性を選択的に阻害し、ウイルスの mRNA 合成を阻害することでインフルエンザウイルスの増殖を抑制します。

#### ！！注意事項！！

特に小児・未成年の患者さんにおいて、インフルエンザ治療薬の種類や服用の有無によらず、異常行動などの精神・神経症状が現れるという報告がなされています。また、因果関係は不明ですが、インフルエンザ治療薬の服用後に異常行動と関連すると考えられる転落死等が報告されています。異常行動などの精神・神経症状は多くはインフルエンザ発症から2日以内に発現するとされています。万が一の事故を防止するためにも、自宅において療養をされる際には少なくとも2日間、保護者の方等は小児・未成年者が一人にならないよう配慮してください。

抗インフルエンザウイルス薬を服用することにより、服用していない場合と比べて発熱期間が1～2日短縮され、ウイルスの排泄量<sup>はいせつりょう</sup>も減少し、症状が徐々に改善されていきます。しかし、お薬を服用して熱が下がっても、体内のウイルスがすぐにはなくなるわけではありません。「症状が改善したから…」といってお薬の服用を途中でやめることで、体内に残っているウイルスが周りの人に感染する可能性があります。熱が下がったあとも、お薬はきちんと使い切り、最低2日間は自宅療養<sup>りょうよう</sup>しましょう。また、インフルエンザを予防するためにはマスクや手洗いなど基本的な予防策をとることが大切です。

～お薬のことでご不明な点やご不安な点がある場合には、医師又は薬剤師までご相談ください。～